

適正施設ガイドライン

【スイゲンゼニタナゴ *Rhodeus atremius suigensis*】

2020年9月

公益社団法人日本動物園水族館協会

1 飼育環境

1-1 水温

成魚および未成魚は、外気温に準じる水温（10（冬）～30℃（夏））で飼育可能である。仔稚魚は室内飼育（18～25℃）で飼育可能である。一日のうちに温度変化が急激な場所や、著しく高水温や低水温になる場所は飼育に適さない。そのような場所でどうしても飼育しなければならない場合は、クーラーやヒーターを設置するなどして温度変化を少なくする必要がある。

1-2 設置場所

上記の水温条件を満たす場所が望ましい。本種は警戒心が強く神経質なため、水槽の前を頻繁に人が行き交う場所への設置はできるだけ避け、魚が落ち着けるような人通りの少ない静かな場所が望ましい。また、水槽内には水草や流木などの隠れ家を設置しておくことで魚が落ち着く。

1-3 照明（日照、人工照明、照明時間長）

照明は、自然光、人工照明（蛍光灯、LED 灯）のどちらでもよい。人工照明の場合、自然下の日長条件に調整する方が繁殖（成熟）には適している。直射日光があたる場合は、水温が急激に上昇するおそれがあるので注意しなければならない。

1-4 水槽サイズ、面積、容積

水槽の容積は、魚の成長に合わせて変更する必要がある。仔稚魚の場合、45 cm水槽（45×30×34 cm、容量 42ℓ）で 100 個体以下が望ましいが、成長に伴い個体数の密度を減らすか、容積の大きな水槽に移動する必要がある。成魚および未成魚の場合、45 cm以上の水槽で 20～30 個体ほどで飼育することが望ましいが、良好な水質が維持できるなら 60cm 水槽（60×30×36 cm、容量 65ℓ）で 50 個体程度飼育することは可能である。屋外飼育の場合、容積 0.5 t 以上の底面積の広い水槽で飼育が可能である。

1-5 構造、設備、ろ過様式

仔稚魚の場合、スポンジフィルター等によるろ過であれば底砂を敷く必要はないが、エアリフトによる底面ろ過であれば、川砂や珪砂などを敷く。成魚および未成魚の場合は、エアリフトによる底面ろ過または外部式ろ過とし、川砂や珪砂などの砂利や細砂を用いる（底面ろ過材との兼用可）。

1-6 飼育水（水槽）

水道水の汲み置き水、または塩素を中和した水道水でよい。pH は弱アルカリ性を好むが、弱アルカリ性～弱酸性でよい。

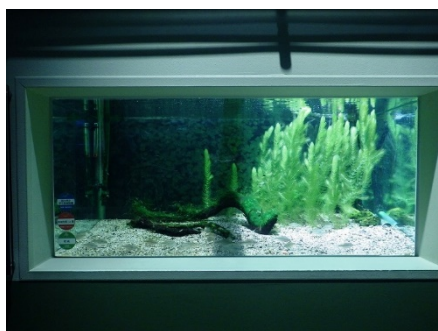


写真1 成魚および未成魚飼育水槽



写真2 稚魚育成水槽